

「紙芝居」そして、語りとの出会い

津田節江（福井県・のまひょうしぎの会）

私が紙芝居に出会ったのは30年余年前でした。山の小さな小学校に勤務していた頃、私の教室に場面緘黙（かんもく）の女の子がいて、家では話せるのに一歩、外に出ると話せない子でした。ある日、彼女は私に一本の紙芝居を持って来て、読んでほしいとの事でした。その頃の私は、帰りの学級会で毎日、宇野重吉の日本昔話を読んでいました。その日、私にいつもになくせがむので、紙芝居を読みました。すると、何枚かを過ぎた時、彼女は大きな声で笑ったのでした。初めて声をだした彼女にクラスの子達は、びっくり感動。

「みどりちゃんがしゃべった！」

と、大さわぎになり、拍手とバンザイの連続でした。いろいろな医療機関に両親は連れて行きましたが、治らなかったのです。その日から彼女は話せるようになり、生き返ったように明るくなったのです。私は、泣き泣き抱きしめてやりました。

それから私は、紙芝居に夢中になりました。何年間は我流で読んでいましたが、先輩の「芸ごとは師匠についての方がいいよ」とのひと言で、実践する日々が今日まで続いています。

紙芝居は、一枚の絵をじいっと見ながら、耳から入ってくる言葉で想像しながら楽しみます。子供達は、その絵の中に自分が入り、くいいるように見ます。私はその子供達の顔色、表情をみながら、私自身もわくわくしながら演じられるようになってきました。

「せっちゃんおばちゃんが来たよ」

と、大きな声で呼んでくれ、その声が心地よく私を元気づけてくれるのです。

数年前、紙芝居の仲間の誘いで、「全日本語りの祭り」に初めて参加させてもらい、東北の語りを聞き、感動をこえたショックをうけました。演じることは同じでも、相手に伝える語り方が奥深く、目を閉じて聞きました。

相手の心に訴えていく、伝えていく語りは、さまざまな方法があり、たくさんの語りを新鮮でドキドキしながら、あっという間の二日間だったのを憶えています。

前回の加賀大会で、滋賀県の語りの方が、「蛙の坊様」という作品をしてくださり、

「ゲコ、ゲコ、ゲコ、ゲコ、ナンマイダー チーン」。

というお経のリズムのおもしろさがなんともいえず、即、帰福したら紙芝居にしたいと思いました。その方にお願ひし、原作者に了解を取って頂き、絵を描いてくれる友人と作り始めました。しかし、耳に残っている言葉のリズムと場面の絵がなかなか合わず、描きなおしをくり返し。出来あがった作品を何度も演じてみましたが、自分が楽しくならなかったのです。そこで、絵をじいっと見て、坊さまとの会話、情景を想像し、何度も練習し、子供達の前で演じ、子供達の顔をみながら、心地よいお経を少しずつ楽しめるようになりました。

子供達が、紙芝居が終わった後、

「ゲコ、ゲコ、ゲコ、ゲコ、ナンマイダー チーン」。と、私の周り

で口ずさむのを見て、作ってよかったとつくづく思いました。

相手に伝わる楽しさ、喜びは「語り」も「紙芝居」も同じであり、お互いが学び合いながら、自分の演じ方を創っていけるすばらしい仲間達とこれからも楽しみたいと思います。77歳を迎えた私ですが、人を楽しませる、わくわくドキドキさせる紙芝居演者として、今後も仲間達との交流を大切にしていきたいと思っています。



紙芝居 カエルの坊さま